

305. 平成13年度滋賀県下における 発掘調査の紹介（その2）

9. 古墳時代中期の方墳・中世集落跡を検出 草津市 野路岡田遺跡

平成13年度の野路岡田遺跡発掘調査は野路西部土地区画整備事業に伴う9.6ha（4ヵ年）の調査対象面積の内、2.7haの面積を調査した。平成12年度の調査では、古道（通称『馬道』）に沿った12世紀後半～13世紀の掘立柱建物跡群が検出され、当遺構群について「吾妻鏡」等の文献に散見される「野路宿」である可能性を指摘してきたところである。今年度の調査は、昨年度調査区の西側隣接地を調査し、前年度同様、7～11世紀、12世紀後半～13世紀代の遺構、遺物を多数確認した。特に平成12年度調査地より約120m西方の間には、古道に規制された建物群が認められるのに対し、約120m以西では、古道に規制された当該時期の建物跡群は認められず、古道から南北に離れた位置で、区画溝等により独立した建物群が点的に確認された。



野路岡田遺跡全景（東から）

調査区の北東部では造り出しを持つ長辺約21m、短辺約19mの方墳が1基検出されている。墳丘は後世の削平により消失していたが、周濠内からは5世紀後半の須恵器（坏・高坏等）とともに円筒埴輪・朝顔形埴輪等が出土した。加えて、周濠内からは、後代の

土師器、須恵器、土馬、陶馬等が出土している。

周濠の東側には周濠内出土の埴輪よりも若干時期の古い円筒埴輪（黒斑あり）の破片を敷き詰めた遺構（長さ1.8m、幅0.45m）が検出されている。このため、当古墳の周辺にはこの埴輪を有する他の古墳が存在する可能性もある。なお、当該遺跡の北方には矢倉古墳群、南方には南笠古墳群、櫛差古墳群等があり、これらの古墳との関連は今後の検討課題と考える。

（草津市教育委員会 山田龍太郎）

10. 主郭跡で本格的な城道と礎石建物を確認 米原町 鎌刃城跡

鎌刃城跡は米原町大字番場に所在する中世の山城である。今回の調査は平成10年度より実施している町内中世城館詳細分布調査の一環である。今年度の調査成果としては、主郭内部の礎石建物、主郭虎口北側斜面の通路遺構、主郭南辺石塁の石積み、主郭南隣郭の石積みを有する掘切等が挙げられる。

まず、主郭内部の礎石建物であるが、検出された礎石列は主殿の一部を構成していた可能性が高く、建物の外側には縁が存在していたと考えられる。

次に、主郭虎口北側斜面において五段の石段と整地土と石積みによって構成される通路遺構が検出された。通路幅は約3m90cmを測る。

主郭南辺石塁の外側法面には石積みが施されており、その高さは4m近くにも及んでいる。ここの石積みの特徴としては、下段～中段にかけては小振りな石を多用し、上段部分には、一人ではとても動かさないような巨石を配している点である。これは、構造的に石積みを強固にするとともに、外来者に対するの権威の象徴としての効果を持たせる意味があったと思われる。

また、主郭南隣郭には、両側に石積みを有する掘切が存在している。堀幅と高さはそれぞれ3mを測る。郭群内に存在する唯一の掘切であることから、どのような機能を果たしていたのか非常に興味深い。

出土遺物は若干の土師器・瀬戸美濃製品・鉄釘等が出土したのみであった。

今回の調査成果が示すように、鎌刃城跡には、後の近世城郭に通ずるような築城技術が各所で見られる。

中世の山城としては、正に当時の最高水準に達して

いたと言えよう。



主郭の礎石建物と石壁

(米原町教育委員会 土井一行)

副葬品については、棺内東に鉄剣（全長80cm）と西に鉄刀（全長60cm）を納め、棺外西蓋石下に鉄鏃群を置く。

打下古墳の特筆は棺内に古人骨の一部（頭蓋骨）が良質な形で残されていたことである。人骨調査は後日に委ねる。

おわりに、打下古墳の年代であるが、鉄鏃の型式より5世紀中葉頃であろうとの所見をいただいている。一方、箱形石棺であるが県内では類似がとぼしく特異な存在となる。同種の石棺は、丹後や播磨地域に多く見受けられる墓制で今後調査研究を進めて行く中で他地域との交流がひとつの課題となるであろう。古墳については、幸い関係部署のご協力により現地保存されたことを報告させていただく。

(高島町歴史民俗資料館 白井忠雄)

11. 打下古墳—古墳時代中期— 高島町 打下古墳

平成13年11月7日朝、高島町の東南に位置する打下集落日吉神社裏山で上水道配水施設新築工事中に石棺内から人骨が出土した。ただちに埋蔵文化財発掘調査を実施する。

まず、古墳の立地は、三尾崎と呼ばれている岬の北へ張り出す一尾根上の平坦面にある。ここからは高島平野が一望でき、遠く湖北の山なみまでも望むことができるロケーションである。

古墳の墳丘については工事中の削平によって不明である。

内部主体については、箱形石棺（現時点では1基）で内法長さ205cm×最大幅42cm×深さ30cmの容積を有する。床面は荒い砂を敷く。石材については、側壁を板材で造り、東側2枚・西側3枚・両小口1枚である。蓋石は下部4枚・上部3枚で構成し、防水のために良質の粘土を各すき間に埋める。また、内部は朱かベンガラを塗る。



打下古墳の箱形石棺

12. 息長古墳群2001 近江町 息長古墳群

長浜平野の東域を南北に伸びる横山丘陵の南端域に所在する「息長古墳群」は、3世紀前半から6世紀後半にかけて連綿と築かれた近江町所在の古墳群である。これまでは「塚の越古墳」「狐塚5号墳」「山津照神社古墳」など、後期の前方後円墳のみクローズアップされてきたが、近年、大学機関との協働によって前期・中期の実態も少しずつ明らかにされてきている。

平成13年度に調査されたものは、息長古墳群のうち「奥深5号墳」と「人塚山古墳」の2基である。

奥深5号墳は、同古墳群中で、東域の丘陵頂部、標高160mに所在する。38m×26m規模の楕円形を示す墳形は、稚拙な葺石で覆われている。また、墳丘中央では、岩盤を削りぬいた墓壇が確認された。その構造は、岐阜県岐阜市瑞龍寺山古墳・同美濃市観音寺山古墳等の墓壇構造に酷似する。墓壇は、後世に盗掘を受けており、攪乱した砂礫堆積が認められ、最下層より銅銭「寛永通宝」が出土した。また、墳丘上と墓壇内より須恵器甕の破片が出土していることから、おおむね5世紀代の古墳と考えられる。

人塚山古墳は、これまで「湖北最後の前方後円墳」としてとらえられてきた。地元「顔戸区」のまちづくり事業の一環で、同古墳を古墳公園化する機運が高まり、大手前大学史学研究所と合同で発掘調査を実施することとなった。墳頂部と墳丘東部・南部・北部に設けた調査区では、岩盤整形の痕跡と、近世・近代遺物の構成盛土が確認された。出土遺物の一部には古墳時代の須恵器も含まれるものの、構成盛土の構造から、古墳時代の前方後円墳ではなく、近世末から近代初期に構築された遺構であると推論づけるに至った。



人塚山古墳



熊野本19号墳（東から）

なお、近江町教育委員会では平成14年度（2002）に4世紀のものと推測される丘陵尾根部の前方後円墳「定納5号墳」の調査を実施し、さらに息長古墳群の実態を明らかにしていく予定である。

（近江町教育委員会 宮崎幹也）

いずれの古墳も出土遺物は少なく、築造年代等は不明確である。今後の調査で古墳群全体の存続時期や、熊野本遺跡で確認した弥生時代後期末の墳丘墓との関係について明らかにしていきたい。

（新旭町教育委員会 宮崎雅充）

13. 高島郡新旭町熊野本古墳群の調査 新旭町 熊野本古墳群 6・12・18・19号墳

熊野本古墳群は、新旭町の西部に広がる饗庭野台地上の先端部に位置する。昭和40年代の県教育委員会の分布調査によって36基の古墳の存在が判明した。

平成12年度より町教育委員会では、分布調査と主要古墳である6号墳・12号墳・18号墳・19号墳の範囲確認調査を実施している。

6号墳は全長約28mの前方後方墳である。墳丘は山側である北側に対して、平野側の南側が広く、平野部を意識した造りである。前方部墳頂の盛土最上層からは、同一個体と思われる受口状の口縁部破片と底部破片が出土した。また、付近からベンガラも検出している。前方部墳頂での何らかの行為が推定される。

12号墳は6号墳と同じ尾根上に位置する。全長約30mの前方後円墳と思われる。墳丘は盛土の流失が著しい。前方部の盛土流失土内から円形浮文で加飾された二重口縁壺の口縁部破片が1点出土した。土器の形態や出土位置から古墳に伴う遺物と思われる。

18号墳は幅約22mの方墳である。盛土の流失は少なく墳丘の残りは良好である。墳丘盛土内から二重口縁壺の破片が1点出土した。外面には朱が確認できる。

19号墳は直径約36mの円墳で、古墳群最大の墳丘規模を有する。墳丘西側は尾根を切断するように掘込み、成形している。墳丘東側には段築が存在する（写真1）。一段目は地山削り出し、二段目は盛土成形である。墳丘盛土と思われる層から須恵器の小破片が1点出土している。

14. 鎌倉時代の屋敷地を検出 愛知川町 市遺跡

市遺跡は、愛知川の右岸の扇状地、扇端部に位置し、弥生時代から江戸時代の集落遺跡として周知されている。当遺跡は、昭和57年以来、愛知川町教育委員会と滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会の調査が数度にわたって行われ、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物、平安時代後期の掘立柱建物・溝、江戸時代の井戸等が検出されている。

平成13年度の調査は、愛知川町調整池工事に先立ち、平成11年度より3ヵ年の計画で実施されてきた発掘調査の最終年次にあたる。調査面積は、対象地3万㎡のうち、未調査地1万㎡である。過年度の平成11・12年度の調査では、古墳時代初頭の流路、飛鳥時代の掘立柱建物、平安時代末～鎌倉時代にかけての井戸・土壙墓・掘立柱建物、鎌倉時代以降のものと考えられる石敷きの道などが検出されている。

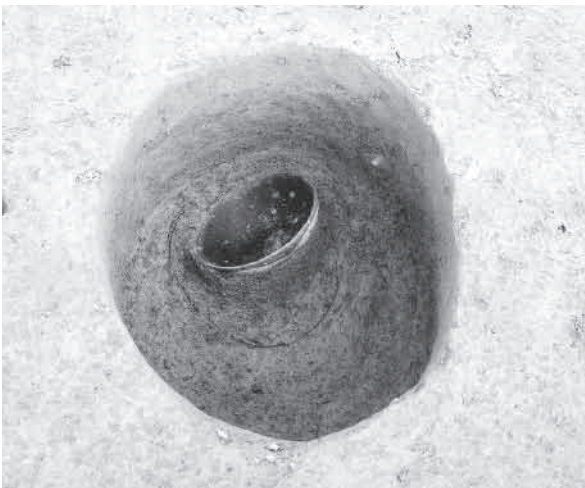
平成13年度の調査では、古墳時代初頭の流路、飛鳥時代の竪穴住居（13棟）・掘立柱建物（1棟）・溝・流路、鎌倉時代の掘立柱建物（14棟）・溝・廃棄土坑等が検出された。特に、鎌倉時代の遺構は、東西×南北、約50×80mの規模で、溝（区画溝—幅1.2～1.5m、深さ約50cm）によって区画された屋敷地内の遺構群であることがわかった。区画溝内には、主に掘立柱建物13棟、個々の建物を区画している溝（小区画溝—幅35～100cm、深さ25～80cm）が検出されている。これらの遺構は、区画溝にあわせ、ほぼ南北・東西の方位を向いている。掘立柱建物は、規模が2間×2間

(約20m)の小さなものから、6間×5間(約140m²)の大型のもの、規模に大小がみられる。区画溝、小区画溝、建物の切り合い関係等より、大小の建物の組み合わせで3～4棟が1グループ、3時期程度に分けられると考えられる。遺物としては、黒色土器、瓦器、山茶碗、土師器の大皿・小皿・台付皿・羽釜、常滑焼の捏鉢・甕などを中心とした日用雑器が、おもに区画溝、小区画溝から出土している。少量であるが、輸入陶磁器片も見つかっている。



小区画溝遺物出土状況

本年度で3ヵ年にわたる3万m²の現地調査が終了した。この現地調査の成果と整理をとおして遺物等の詳細な検討により、当地域の古墳時代初頭からの集落の



柱穴遺物出土状況

動向を知ることが可能となった。なかでも、今年度調査で検出された、溝で区画されている屋敷地は、ほぼ全面調査することができ、区画内部の様相も把握することができた。このことは、鎌倉時代の農村の景観を復元する貴重な材料となると考えられる。

(助滋賀県文化財保護協会 堀 真人)

15. 秀吉城下町の調査

長浜市朝日町 長浜町遺跡

長浜町遺跡は、秀吉の長浜築城にともない造られた城下町と、近世門前町の複合遺跡である。

発掘調査は、長浜幼稚園新園舎築造にともなうもので、長浜城の外堀東側に隣接する。また、近世長浜町町年寄の吉川三左衛門の屋敷としても周知されており、吉川家に関連する遺構の検出が考えられていた。

調査では、近世面で4時期の礎石建物跡・ピット群・酒やしょう油類を醸成させたと思われる窯2基を検出し、陶磁器、土師器、銅銭等も、まとめて出土した。特筆すべきは、ウマ足跡の検出であり、長浜城としての外堀が機能しなくなった後に、水上交通用の水路として活用され、物資の搬入・搬出が行われ、荷上げ等の移動には馬が使用されたとの文献記録を裏付ける発見となった。また、吉川三左衛門の三を意味するであろうとみられる、丸に三引の瓦当文の入る丸瓦が出土し、明らかに吉川三左衛門の屋敷地であることを証明する結果となった。

秀吉城下町時代の天正期では、コの字状の溝と南北方向に長い溝、不明石列が検出され、明らかに計画的な町割が行われていたことを実証することとなった。しかし、歴史学者間で論争となる、タテ町割、ヨコ町割かであるかの検証は、調査面積の狭さから検証することは不可能であった。



長浜町遺跡天正期の不明石列と溝

出土遺物は、土師器皿、灰釉陶器碗、瀬戸美濃系播鉢、備前播鉢、信楽播鉢、常滑大甕、青磁碗等がみられたが、以前に調査した下村藤右衛門屋敷出土の遺物に較べて庶民的階層を感じさせる。

また、天正大地震の墳砂も3ヶ所で検出したが、この遺構面で火災の痕跡は無く、被災程度は低いものであったのか。

(長浜市教育委員会 西原雄大)